

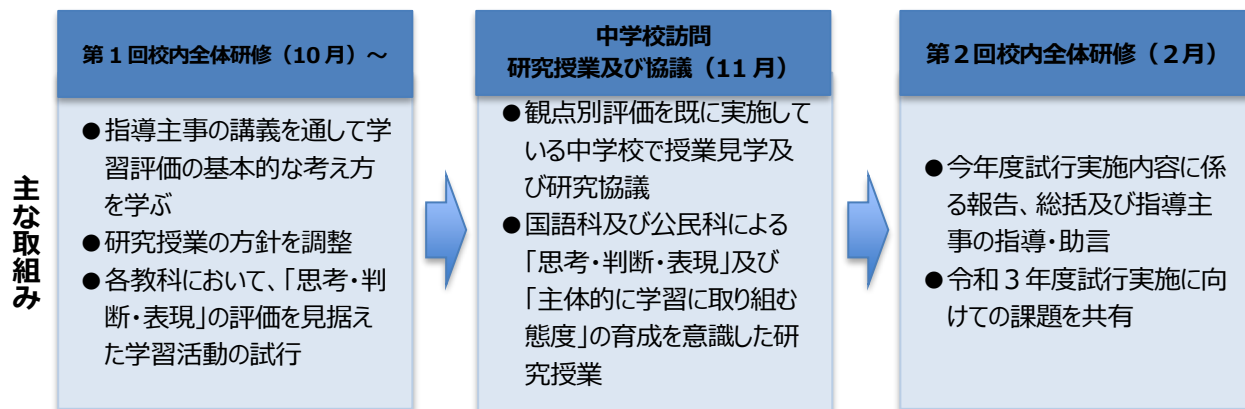
府立鳳高等学校の取組み

(1) 学校教育目標（めざす生徒像）

- 夢・志の実現に向かって粘り強く挑戦できる生徒
- 解決すべき課題にしっかりと取り組むことができる生徒
- 主体性をもって多様な人々と協働できる生徒

(2) 主な取組みと組織体制の準備

- テーマ…観点別学習状況評価の観点のうち、特に「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育成する授業とその評価方法の研究
- 組織…教頭、首席2名、教務部2名、進路指導部、国語科・地歴公民科・数学科・理科・外国語科より各1名、有志4名 計 15名



観点別学習状況の評価への準備を実践的に行うために校内プロジェクトチームを9月に立ち上げ、そのチームを中心として観点別学習状況の評価について研究し、校内研修を企画・運営しています。研究授業と並行して、プロジェクトチームに携わるメンバーも観点別学習状況の評価の試行を行いました。

(3) 主な実践とその工夫

① 研究授業を通じて、指導と評価の計画から試行する

10月の第1回全体研修会で観点別学習状況の評価の概要についての講義を行い、初任者研修の「単元のねらいを意識した授業づくり」の実践を兼ねて、初任者が11月に国語科と公民科で研究授業を実施しました。

それぞれの教科の指導主事とタッグを組み、指導と評価の計画の立案から始めました。特に、3観点のうち、「思考・判断・表現」について、単元の中のどこで、どのような方法で見取るのか、見取ろうとしているめざす生徒の姿はどういった姿なのかを具体化し、研究授業に取り組みました。



国語科の授業の様子



公民科の授業の様子

目標：志賀直哉『城の崎にて』と正岡子規の短歌を対比的に読み、自分の考えを深める

事前に設定した判断基準（国語）

	A	B	C
字数	300 字以上	300 字以上	300 字未満
形式	対比・比較の構文を使っている。	対比・比較の構文を使っていない。	対比・比較の構文を使っていない。
内容	「自分」が死を可能性として感じている点と正岡子規が死を現実のものとして想像している点へ指摘ができており論理的な帰結になっている。	「自分」と正岡子規の状況の差異への指摘はないが、「自分」が死への考えを巡らせた理由について教科書をもとに意見を述べている。	「自分」と正岡子規の状況の対比ができていない。

新しく作成した判断基準（国語）

A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> ・「自分」と正岡子規の状況の対比ができています。 ・「自分」が死について考えを巡らせた理由を複数考えられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分」と正岡子規の状況の対比ができています。 ・「自分」が死について考えを巡らせた理由を1つ考えられている。 	Bの基準を満たしていません。

【問題点】 ・目標と評価規準が合っていない。⇒ 評価のための評価になってしまう。
 ・AとCの評価がつく生徒が多い、

研究協議では、グループワークとして、事前に設定した判断基準を元に、実際に生徒がまとめた課題を確認しながら評価を行いました。その際、参加者からは、「判断基準を予め考えているが、課題提出後、変更していくことを考えておくべきではないか」、「同内容の授業を、先に実施したクラスと後で実施したクラスとで指導の手立てが異なった場合に、課題の出来に差が出るのが考えられるが、その際はどうか」など、様々な疑問が湧出し、判断基準の定め方や方針について、生徒の姿をベースにした具体的に実のある協議が行われました。

そして、2月の第2回全体研修会に向け、再度、判断基準の設定の仕方や課題の在り方について、研究授業担当者は指導主事とともに検討し、評価基準を練り直し、課題や授業の構成などを再考し、指導と評価の一体化への理解を深めていきました。

② 観点別学習状況の評価を実施している中学校の授業見学、研究協議から学ぶ

すでに観点別学習状況の評価を実施している地域の中学校へ赴き、国語、社会、数学、理科、英語の授業を見学後、授業の進め方や、評価課題及び判断基準の設定等について中学校教員とともに研究協議を行いました。観点別学習状況の評価に係る内容だけにとどまらず、中学校から高校への学習の連続性についても学ぶ機会となりました。

「主体的に学習に取り組む態度」については、どのように評価していくのがよいのか、中学校でも頭を悩ませていることが分かり、共に考えるべき課題として挙がってきました。

③ 校内プロジェクトチームによる試行と研究及び教育センターとの連携

数学、理科、外国語の定期考査において、「思考・判断・表現」を評価するための問題とはどのような問題なのかについて、教育センターと連携し、協議を重ねました。2学期の定期考査の問題を分析し、どの観点を見取る出題なのか出題者のねらいを整理した上で、果たしてその問題がその観点を見取る問題になっているのかを検討し、改善策を考えたのです。

2月に行った第2回全体研修会では、研究・試行を行う中で課題として挙がってきた「主体的に学習に取り組む態度」の評価について指導主事が講義を行いました。そして、プロジェクトチームのメンバーそれぞれが1年間の研究・試行の総括として発表を行うとともに、次年度へ向けての方針を教員全体で共有しました。令和4年度に迫った観点別学習状況の評価について、様々な課題を見つけることができたこと、そして「評価について考えることで、授業の在り方を考え直す機会になった」、「『思考力、判断力、表現力等』を見取るための定期考査の問題を教科会などで検討してみたい」など、教員の授業や定期考査に対する意識の変容が見られたことが大きな成果です。

鳳高校では、次年度も引き続きパッケージ研修支援を活用しながら、より多くの教員が加わり、全教科で観点別学習状況の評価の試行を行う計画です。